被災者アンケート

未来描けず心が不調

河北新報社と東北大などが、東日本大震災から１年を前に実施したアンケートからは、住宅再建や街づくり、収入などについて、被災者が不安を募らせている実態が明らかになった。復旧・復興に対する見方など、自治体間で温度差がある課題も多い。自由意見には今後の備えに役立つ声が多数寄せられ、地域性や住民ニーズに考慮した細やかな復興策に加え、震災の教訓を生かす取り組みが求められている。

「気分が沈む」7割超

不安度

最近1カ月の心の状態は、喪失感や不安感を抱く被災者が目立った。不調の自覚症状が「あった」とする回答は、「気分が沈む」73・1%、「気持ちが落ち着かない」72・6%、「寂しい気持ちになる」70・1%の順に多い。

焦りや無気力などの症状も「次々とよくないことを考える」（65・7%）「何をするのもおっくうだ」（65・4%）「集中できない」（62・4%）と、3分の2近い被災者が訴えた。

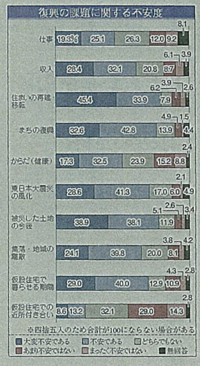
体の状態は「頭痛・頭が重い」「のどが渇く」の訴えが比較的多く、それぞれ46・5%、41・8%。他の4項目は自覚症状が「ない」とする回答が6割を占めた。避難所などで暮らしていたところに比べて、少しずつ生活が落ち着いてきたことが一因と考えられる。

ストレスの原因とみられる不安要素は、「大変不安」「不安」を合わせると、「住まいの再建・移転」「被災した土地の今後」「まちの復興」の住まいの関係が、そろって7割を超えた。

次いで「東日本大震災の風化」を懸念する被災者も69・9%、「仮設で暮らせる期間」への不安は69・0%。これらは、時間の経過とともに不安視する住民が増えると思われる。

自治体別では南三陸町が「住まいの再建」「土地の今後」「まちの復興」「震災の風化」の4項目で、「大変不安」が7割を超え、不安度が極めて高かった。

1年後の生活については「変わらない」が51・6%で半数を超えた。「かなり悪くなる」「やや悪くなる」の合計は26・1%で、「かなり良くなる」「やや良くなる」を合わせた19・5%を上回った。生活再建の見通しが定まらず、慎重な見方や悲観的な見方が大勢を占めたとみられる。



「全体的に遅れ」半数

地域復興

被災時に住んでいた地域の復旧・復興状況についてどのように感じているかを聞いたところ、50・0%が「思っていたよりも全体的に遅れている」と答えた。回答は自治体間の差が大きく、最大で65・7ポの開きがあった。

市町別に見ると、南三陸町が91・7%で突出していた。気仙沼市（63・5%）、七ケ浜町（57・6%）、山元町（54・0%）の3市町も過半数を占めた。最も低かったのは、岩沼市の26・0%だった。

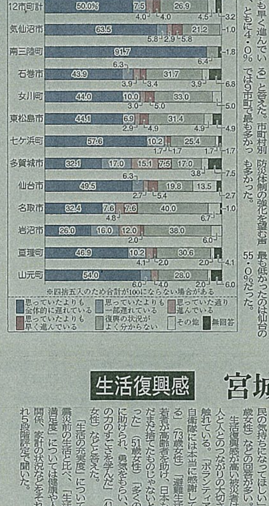
全体では、「復興の状況がよく分からない」が26・9%で続き、計画策定段階、決定後の情報発信も課題になっている。

「思っていたよりも一部遅れている」は7・5%。「思っていた通り進んでいる」と「思っていたよりも早く進んでいる」は、ともに4・0%にとどまった。

復興のために重点化すべき施策を、26項目から複数で選んでもらったところ、49・7%が「住民の生活環境を確保する」と答えた。市町村別では9市町で最も多かった。

「安心できる地域医療を確保する」40・3%、「大津波に備える」が36・5%、「防災機能を再構築する」33・1%など、防災体制の強化を望む声も多かった。

被災時に住んでいた地域の夜の明るさを聞いた設問では、75・1%が「震災前よりも暗くなった」と回答。気仙沼市と南三陸町では9割を越えた。最も低かったのは仙台の55・0%だった。



住まいの再建資金、地域医療、地域住民の離散など復興の課題は、お年寄りにも重くのし掛かる

震災で学んだことは―

高年層 命を守る大切さ 若年層 自ら動く必要性

自由回答として「震災を受けて学んだこと」を聞き、世代別に傾向を調べた。高年層は「自分の命を守る大切さ」「行政は当てにできないこと」を挙げる回答が目立ったのに対し、若年層は「自らが復興に向けて動く必要性」「支援への感謝を忘れないこと」など前向きな意見が多かった。

高年層の回答では、行政対応への不満が多く聞かれた。「避難場所が平たん地だったので、津波に対応できなかった。行政はもう少し考えてほしい」（85歳男性）「行政の対応があまりに遅い。相談窓口が分からない」（76歳男性）

「自分の体を守ることが第一。健康と明日の生きる道を考えて行動した」（85歳男性）などの回答も目立った。

若年層は「待つだけでなく、積極的に行動しないと復旧、復興は進まない」（39歳男性）「各方面からの食料、衣料支援に対し、人間として感謝すること」（27歳女性）などが主立った回答だった。

学んだこととして、自然の恐ろしさも多く挙がった。「自然はものすごい。助かった命に対して前向きに考えるようになった」（68歳女性）「避難はてんでに早く高い場所に逃げることが大事。津波は人間の歩きより速い。後世に伝えること」（56歳男性）などで、被災経験を後世に役立てる意識が見られた。

東北大災害制御研究センターは「若い世代は将来的な役割を分かっている。半面、年代が高くなると、どうしても周囲に頼りがちとなり、割り切れなさもあるようだ」と分析している。

宮城県 北部ほど低く

生活復興感

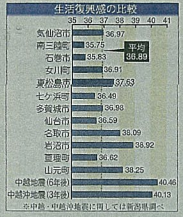
「生活の充実度」「生活の満足度」「1年後の生活の見通し」の3項目についてそれぞれ5段階評定で質問し、各評定の合計で示される「生活復興感」を比較した。宮城県南に比べ、県北の方が生活復興感が低い傾向が出た。

生活復興感は、阪神大震災（1995年）、新潟県中越地震（2004年）、中越沖地震（07年）の被災者に対しても防災研究機関が同様の測定を行っている。

生活復興感が低い被災者は、国や県、市町への不満、不平等感を訴えている。「家が全壊・流失し、何もかもなくなった人と家も家財もある人が同じ被災者として扱われるのは疑問」（40歳女性）「国は後手後手。支援をもっと早く進めてほしい。住民の気持ちになってほしい」（48歳女性）などの回答が多い。

生活復興感が高い被災者は、人と人とのつながりの大切さに触れている。「ボランティアや自衛隊には本当に感謝している」（73歳女性）「避難生活で若者が高齢者を助け、日本もまだまだ捨てたものじゃないと思った」（51歳女性）「多くの人に助けられ、勇気をもらい、人の力のすごさを学んだ」（41歳女性）などと答えた。

「生活の充実度」については震災前の生活と比べ、「生活の満足度」については健康や人間関係、家計の状況などをそれぞれ5段階評定で聞いた。



被災者アンケート結果

問　最近１カ月で、次に挙げた心と体の状態をどのくらい体験しましたか	まったくない	まれにあった	たまにあった	たびたびあった	いつもあった	無回答
気持ちが落ち着かない	24.4	14.9	28.3	17.8	11.6	3.0
寂しい気持ちになる	27.8	14.9	25.3	18.7	11.2	2.2
気分が沈む	24.0	18.5	27.1	17.5	10.0	2.9
次々とよくないことを考える	31.4	23.8	20.8	12.0	9.1	2.9
集中できない	33.7	22.3	20.1	11.9	8.1	3.9
何をするのもおっくうだ	31.0	22.7	19.2	13.2	10.3	3.6
動悸（どうき）がする	63.9	12.3	12.0	6.5	2.3	3.0
息切れがする	67.2	13.0	10.0	3.4	2.7	3.6
頭痛、頭が重い	50.8	17.5	16.5	7.5	5.0	2.7
胸がしめつけられるような痛みがある	74.7	8.8	8.6	2.6	1.3	4.0
めまいがする	65.6	12.9	11.0	4.7	2.4	3.3
のどが渇く	55.0	15.3	12.3	8.2	6.0	3.2

問　次の項目についてあなたの不安度を教えてください	大変不安である	不安である	どちらでもない	あまり不安でない	まったく不安でない	無回答
仕事	19.3	25.1	26.3	12.0	9.2	8.1
収入	28.4	32.1	20.8	8.7	6.1	3.9
住まいの再建・移転	45.4	33.9	7.9	6.2	3.9	2.6
まちの復興	32.6	42.8	13.9	4.9	1.5	4.4
からだ（健康）	17.3	32.5	23.9	15.2	8.8	2.4
東日本大震災の風化	28.6	41.3	17.0	6.0	2.1	4.9
被災した土地の今後	38.9	38.1	11.9	5.1	2.6	3.4
集落・地域の離散	24.1	39.8	20.0	8.1	3.8	4.2
仮設住宅で暮らせる期間	29.0	40.0	12.9	10.9	4.3	2.8
仮設住宅での近所付き合い	8.6	13.2	32.1	29.0	14.3	2.8

問　震災前の生活との変化について教えてください	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
忙しくて活発的な生活を送ることは	35.0	21.3	26.2	8.6	5.2	3.7
自分のしていることに生きがいを感じることは	27.8	22.6	33.9	8.6	3.2	3.9
まわりの人々とうまく付き合っていくことは	13.0	18.1	47.8	12.3	5.8	2.9
日常生活を楽しく送ることは	22.5	28.7	35.6	7.1	3.0	3.1
自分の将来を明るいと感じることは	33.2	27.7	29.0	5.5	1.3	3.4
元気ではつらつとしていることは	21.4	27.4	39.7	5.3	1.7	4.4
家で過ごす時間は	6.9	8.2	22.9	23.1	36.7	2.2
仕事の量は	31.3	13.9	34.0	7.9	5.5	7.5

問　次の項目の満足度を教えてください	大変不満である	やや不満である	どちらでもない	やや満足している	大変満足している	無回答
毎日のくらしに	17.0	33.5	32.5	11.8	3.3	2.0
ご自分の健康に	11.8	32.0	37.6	11.2	5.3	2.2
今の人間関係	7.4	16.3	50.7	16.7	5.9	3.0
今の家計の状態に	22.8	30.3	32.5	7.7	2.3	4.5
今の家庭生活に	13.2	27.3	40.9	10.9	4.4	3.3
ご自分の仕事に	19.9	16.4	44.4	6.9	2.1	10.3

問　心と体の状態を総合的に評価してください。	
良好である	16.4
まあ良好である	34.9
どちらでもない	19.2
やや悪い	19.4
悪い	3.5
無回答	6.6

問　あなたの震災前の職業と現在の職業について選んでください	
同じ仕事を続けてる	23.2
同じ勤務先で仕事内容が変わった	1.4
転職、転業した	8.6
失業、廃業した	10.3
退職した	4.8
その他	44.8
無回答	6.8

問　あなたの世帯の仕事による現金収入（月収）は、震災前と比べてどのように変化しましたか	
まったくなくなった	14.6
半分以下に減った	12.8
半分程度に減った	7.9
やや減った	15.2
あまり変わらない	34.5
やや増えた	1.7
大幅に増えた	0.5
その他	6.7
無回答	6.0

問　仮設住宅を出た後の自宅の再建や移転の予定は	
震災前の居住地に戻りたい	15.7
同じ市町内の安全な場所に移りたい	35.2
市町外に移転したい	5.4
見通しを立てられない	31.4
その他	7.3
無回答	5.1

問　自宅の再建や移転の妨げになっている問題は（複数回答）	
再建や移転の自己資金が足りない	50.3
二重、三重ローンになってしまう	11.3
制限で融資を受けられない	25.2
高齢なので悩む	25.6
公的融資、支援基金の内容が不明	20.7
復興計画の詳細が分からない	41.0
仕事の再開や就業のめどが立たない	16.0
元の地域社会が壊れている	23.2
地域の復旧のめどが立たない	16.4
家族が分散してしまっている	9.8
その他	7.8
特に問題や妨げはない	7.9
無回答	6.2

問　復興のために重点化すべき施策は（複数回答）	
住民の生活環境を確保する	49.7
廃棄物を適正に処理する	11.9
持続可能な社会と環境保全を実現する	10.3
安心できる地域医療を確保する	40.3
未来を担う子どもたちを支援する	22.1
だれもが住みよい地域社会を構築する	28.9
ものづくり産業を復興する	9.0
商業、観光を再生する	10.3
雇用を維持、確保する	32.2
魅力ある農業、農村を再興する	12.9
活力ある林業に再生する	1.0
新たな水産業を創造する	11.0
一次産業を牽引する食産業を振興する	6.6
道路、港湾、空港などの交通基盤を確保、整備促進する	24.3
海岸、河川などの県土を保全する	16.2
上下水道などのライフラインを復旧する	11.0
沿岸市町をはじめとするまちを再構築する	18.9
安全、安心な学校教育を確保する	27.3
家庭、地域の教育力を再構築する	5.1
生涯学習、文化、スポーツ活動を充実させる	4.5
防災機能を再構築する	33.1
大津波等に備える	36.5
自助、共助による市民レベルの防災体制を強化する	12.0
安全、安心な地域社会を構築する	26.9
その他	2.4
特にない	2.1
無回答	3.8

問　震災前に比べて地域の夜の明るさはどう変わりましたか	
震災前より明るくなった	3.4
震災前の状態に戻った	4.8
震災前より暗くなった	75.1
震災の影響はなかった	2.0
その他	6.8
わからない	2.5
無回答	5.4

問　1年後の生活は今よりも良くなっていると思いますか	
かなり良くなる	2.0
やや良くなる	17.5
かわらない	51.6
やや悪くなる	15.1
かなり悪くなる	11.0
無回答	2.7

問　地域の復旧、復興状況への印象は	
思っていたよりも全体的に遅れている	50.0
思っていたよりも一部遅れている	7.5
思っていた通り進んでいる	4.0
思っていたよりも早く進んでいる	4.0
復興の状況がよく分からない	26.9
その他	4.5
無回答	3.2

3.11 巡りくる「あの日」

地域再生へ切実な声

河北新報社は東北大などとの共同アンケートに合わせ、4市町で被災者に地域課題についても聞いた。テーマは宮城県亘理・山元両町が農業、石巻市が雇用、岩手県大槌町が地域医療で、いずれも地域再生の鍵を握る。

資金難 継続は難しく

農業

宮城・亘理、山元

亘理、山元両町の被災者に「家族や親類は農業を続けているか」と聞いた結果、「辞めた」が32・9%に達した。「決めかねている」との回答も20・5%あり、津波被害で営農継続が難しくなっている現実が明らかになった。

「農業を続けている」15・1%、「一時休んだが再開した」2・7%を合わせても2割に届かなかった。「今後、農業を再開する予定」は19・2%だった。東北農政局が昨年11〜12月、仙台市内の被災農家を対象にしたアンケートでは「耕作をやめたい」は約2割で、単純比較はできないが、離農傾向がやや強く出た。

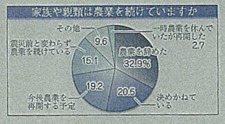
「家族（本人を含む）や親類が農地被害を受けたか」の問いでは、被害を受けたという回答が全体の6割を超えた。

このうち「浸水被害で、今も農作物を作ることができない」が56・9%に対し、「被害はあったものの今は耕作ができる」は3・9%だった。沿岸から平野部が続く宮城県南では、津波による浸水農地の割合が3〜5割に達しており、農地被害の大きさを反映した結果になった。

自由回答では、農業の継続や再開に際し、「銀行から借り入れできない」（亘理町・女性44歳）、「農機具が必要だが家の再建もある」（山元町・男性65歳）など、資金面の不安、苦境を訴える声が多かった。

「高齢者が農業を辞めていく。若者を増やすためにも機械化が必要」（山元町・男性78歳）、「土地を買い上げてもらって代替地をもらうなど、共同で新しく農業を始められる支援がほしい」（亘理町・男性64歳）といった意見もあった。

農業の質問は、亘理、山元両町の102人から回答を得た。



希望と求人 合致せず

雇用

石巻

震災で多くの離職者が出た沿岸部では、求人は増えているものの、再就職が思うように進んでいない。石巻市で仕事が決まらない理由（複数回答）を聞いたところ、「希望する業種や職種が見つからない」が23・5%を占めた。「給与や勤務地などの雇用条件」も17・3%あり、雇用のミスマッチが生じている実態があらためて分かった。

復興需要で土木建設関連などの求人は増えているが、従来と同じ業種や職種を望む人は多い。女性が多く携わっていた水産加工業は事業再開が遅れている。4・9%が「勤め先の再開を待っている」と回答した。

増えている求人も、資格や経験が必要だったり、期間限定の雇用だったりして、希望と合わないケースも目立つ。

「本格的に仕事探しができない」との回答も16・0%あった。生活環境が激変し、暮らしの立て直しにも時間がかかっている人も多い。失業手当が切れる人も出始める中、就職活動の長期化に伴う働く意欲の低下も懸念される。

自由回答では、「仮設住宅からのバスの本数が少ない」「通勤に必要な車がない」といった女性の声が目立ち、交通手段の問題で勤務地が限られている事情もうかがえる。「保育所が定員いっぱいで子どもを預けられない」との声もあり、子育て環境の整備も求められている。

雇用関連には石巻市の53人から有効回答があった。

入院機能の復活望む

医療

岩手・大槌

岩手県大槌町は東日本大震災で全ての医療機関が被災した。町民100人を対象に地域医療に関して調査した結果、不安を感じているとの回答が6割に上った。拠点の県立大槌病院と4診療所が仮設で診療を再開したものの、入院機能が回復していないことなどが要因となっている。

地域医療体制に安心感を持てるかどうかの回答はグラフの通り。「不安」「やや不安」を合わせると60%で、「安心」「やや安心」は計38%だった。

不安の理由は「（町内唯一だった）大槌病院に入院機能がない」が23%で最多。「夜間・休日体制が不十分」16%、「近くに医療機関がない」13%と続いた。

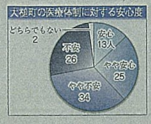
県が新年度に再建内容を固める大槌病院の入院機能の在り方も聞いた。望ましい病床数は「震災前と同じ規模（121床）」が31人、「震災前の利用実績と同じ約60床」が55人で、8割以上が入院機能の復活を求めた。

医療機関への交通手段（複数回答）は自家用車が65人で、町民バス24人、タクシー11人と続いた。町民バスは仮設住宅団地と町中心部を平日で5〜6往復しているが、増便やルート改善を求める声が目立った。高齢者からは「足がなく通院は控える」と切実な声も聞かれた。

震災前と現在で、利用する医療機関が変わったかどうかについては、被災した八つの病院・診療所のうち5カ所が仮復旧しており、「変わらない」が73人だった。

自由回答では、20〜40代は「小児科の充実」、50〜80代は「整形外科の診療日増加」の要望が多かった。町内には震災前から日曜祝日・夜間に診療する小児科がなく、大槌病院の整形外科診療日が震災前の月6日から4日に減少した。

調査は2月25日、大槌町の仮設住宅団地10カ所各10人、計100人から聞き取りで回答を得た。



石巻市で泥のかき出し作業を行う東南アジア各国のボランティア。国内外のボランティアが震災直後から被災地に入り、復興を後押ししている

つながり維持して発展を

東北大災害制御研究センター 今村 文彦 教授に聞く

アンケートを共同で実施した東北大災害制御研究センターの今村文彦教授（津波工学）は、調査結果を「メンタルケアの不十分さが数字に現れた」と分析、「焦燥感を取り除くためにも被災者が復興計画に参画し、コミュニティーを維持、強化する取り組みが求められる」などと強調した。

◇

―被災者の現状をどのように見るか。

「被災者が考えるよりも復興が遅いために、焦燥感やもどかしさを強く感じている。復興に向けた取り組みに、多くの被災者が十分に参画できていないことが一因と推測する。さまざまな課題について不安の程度を尋ねた質問では、居住に関わる項目で強く表れていたのが特徴的だった」

―体に比べ、心の状態で良くない傾向が出た。

「十分な説明はできないが、現在の仮設住宅では体調を管理、維持する工夫がされている一方、メンタルケアが十分でないという状況を示唆する。具体的な悩み事を解決する相談場所が必要であり、早期の生活の立て直しが必要だと思う」

―自治体間の温度差も目立つ。

「被害規模だけでなく、自治体の復興計画など将来に向けた地域の取り組みの差が反映された結果だろう。比較的不安度が低い岩沼市は仮設住宅に移ってもコミュニティーが維持されていて、復興に向けた話し合いが進んでいる。逆に不安度が高い自治体は、現在の問題が中心になってしまい、住民がなかなか将来を考えられないのだろう」

―南三陸町で特徴的な数字が出た。

「南三陸町は全ての項目で不安の値が大きい。住居だけでなく、漁業や町の中心部を失ったことが理由かもしれない。震災の風化に対しても不安が強かった。注目を集めた分、熱が冷めてしまうことを心配しているとも考えられる」

―震災から学んだことも多く寄せられた。

「現状の課題の解決を図る一方で、被災時に役立ったこと、事前に準備していたことで厳しい状況でもなんとか耐えられたことにも注目すべきだ。宮城、岩手では、震災前から備えに取り組んできた。今回、役に立ったことを把握して備えを発展させることが大事だ」

―調査結果から見えてきた復興の課題は。

「一つは地域づくり。町内会などのつながりをどう維持して発展できるかがポイント。被害が大きいほど、地域のつながりがばらばらで、復興計画への参画が少ない」

「賛否両論があるが、議論を重ねながら結果としてコンパクトな街づくりを目指さないといけない。人口や産業、生活環境が変化する中で、全ての地域で過去と同じように復興するのは無理がある。現在ではなく将来を考えて、場所の選定や機能について住民と議論する必要がある」

いまむら・ふみひこ　東北大大学院工学研究科博士課程修了。東北大災害制御研究センター助教授を経て2000年から現職。山梨県出身。50歳。

困難克服 力の源は？

自由回答から

アンケートでは、自由回答で被災した当時、危機や困難を乗り越えるために、役立った自分の能力や性格、頼りになった身近な人について聞いた。

避難の習慣や行動力、くよくよしない前向きな性格などの回答が目立つ一方、運を挙げた被災者もいた。頼りになった存在として、家族や子ども、近所の住民、職場の同僚という回答が多数を占めた。

復興の課程で頼りになった人については、自衛隊、ボランティア、自治会役員、近所の住民、家族を挙げる被災者が多かった。

問　震災体験を通じて、危険の回避や困難の克服に役立った自分の能力や性格について教えてください。

●気仙沼市・販売サービス業・男性・33歳
ポジティブな性格だったと思います。家を失って今までと生活が変わりましたが、ネガティブになりませんでした。

●石巻市・パート・女性・38歳
とにかく落ち着くまで冷静にし、行動したことです。慌てず、周りの様子をみたことです。

●女川町・自営業・男性・51歳
波に追われて、家族で山に逃げました。とにかく無我夢中で、家族だけは守らなければという気持ちでいっぱいでした。

●東松島市・経営者・女性・55歳
知人、親戚が亡くなりショックを受けましたが、生かされたので必ず復興するのだという強い気持ちを持っています。

●七ケ浜町・漁業・女性・53歳
全てを受け入れることです。前に目標となるものを見つけ、それに向かって行動することです。とにかく何でもいいので体を動かすことです。

●名取市・事務技術職・男性・36歳
妻と娘の３人で車にいるときに津波にのみこまれましたが、「絶対助かってやる！」と強い気持ちをもっていました。

●亘理町・パート・女性・27歳
趣味や仕事、ボランティアなどまったく違うことをすることによって震災を思い出さないようにしています。

●亘理町・パート・女性・54歳
家の中で母と２人で津波に遭いましたが、前向きで明るい性格だったので生き残れたのだと思います。

●山元町・無職・女性・74歳
自分は常に運動をして体力があったことが役に立ったと思います。どんな時でも最後まで物事を諦めないことも大事です。

問　震災体験を通じて、危険の回避や困難の克服に頼りになった身近な人と、その人の能力や性格について教えてください。

●気仙沼市・漁業・男性・41歳
家族です。そばにいただけでしたが、一緒だったことがうれしく力強かったです。

●南三陸町・無職・女性・70歳
３人の子どもたちが、相談して自分たち夫婦を助けてくれました。親子や兄弟の絆の大切さを感じました。

●南三陸町・無職・男性・75歳
何もありません。親戚もいません。

●石巻市・契約社員・男性・33歳
同僚です。会社から避難する際にリーダーシップを取ってくれました。

●東松島市・主婦・女性・60歳
親戚より、避難所で知り合った人たちが手を貸してくれました。同じ災害を経験したからこその助け合いの力でした。

●仙台市・無職・女性・74歳
県外から来たボランティアです。家の片付けや仮設住宅の戸棚の組み立てなど懸命にやってくれました。

●仙台市・パート・女性・53歳
子どもたちの元気さが、親として頑張らなければという使命感を与えてくれたと思います。

●名取市・パート・女性・37歳
友人です。自分の家も大変な中、毛布や水、温かい食べものを自転車で30分かけて届けてくれました。

●名取市・学生・男性・21歳
消防団員です。震災翌日の朝に助けに来てくれ、自分が着ていたジャンパーを貸してくれました。

●亘理町・販売サービス業・女性・47歳
町内に住む親戚です。洗濯をしてもらったり、お風呂に入れてもらったりしました。

問　復興作業の中で、活躍している人、頼りになっている人や、その人の能力、性格などについて教えてください。

●石巻市・無職・女性・43歳
仮設住宅の自治会長、役員、社会福祉協議会の皆さんは全員被災者なのに、常に住民の立場で働いてくれます。

●女川町・無職・男性・51歳
自分は障害があります。近所の人たちが、一生懸命面倒を見てくれて、感謝してもしきれません。

●東松島市・女性・34歳
ボランティアに助けられています。ボランティアの行動力に私も力をもらいました。

●東松島市・主婦・女性・60歳
同じ地区のお寺の和尚さんは、個人で物資を集めては仮設住宅のみんなに届けてくれました。

●東松島市・無職・男性・85歳
息子と娘。親戚が少ないから、子どもたちに世話してもらっています。独りではないという安心感があります。

●東松島市・主婦・女性・32歳
ブログで知り合った人たちです。会ったこともないのに全国から子供服やクリスマスの贈り物を集めて、仮設の子どもたちにプレゼントしてくれました。

●名取市・パート・女性・55歳
高齢の母がいます。震災後、体調を崩していますが、私が出掛ける時に、仮設の友人が面倒を見てくれます。

●山元町・店員・女性・42歳
ボランティア活動に来た人たちが飲食店を利用してくれます。そのような時も、ボランティアの力を感じます。

●山元町・無職・女性・74歳
ＦＭりんごラジオが、震災時からたくさんの情報を知らせてくれて、今も頼りにしています。